

誰かのお金

静岡県・浜松市立湖東中学校 3年 黄楊 麻理

私は、小さい頃に1回、財布をなくしてしまったことがある。お年玉をもらったばかりの、正月明けのことだったので、その財布には、いつもより多目の金額が入っていた。スーパーの、子供用のゲームセンターで遊びまわっている途中、どこかに置き忘れてしまったらしい。一度家に帰ってからそのことに気づき、親と一緒に、急いで店に戻った。ゲームセンターを、心当たりのある場所を中心に捜しまわったけれど、財布は見つからず、店員に聞いてみたけれど、届けられていないようだった。私と親は、あきらめて家に帰った。私はそのとき、「まだ、残りのお年玉があるし、まあいいか。」と、自分の過ちを、軽いものだと考えていた。しかし、その重さを身にしてみたのは、普段、滅多に怒り声をあげない父に、怒られたからである。そのときの説教は、短いものだったが、私に、忘れることのできない一言をくれた。「お前は、誰かのお金をむだにしたんだぞ。」このことを、父はきっと、私に一番伝えたかったんだと思う。なぜなら、父は誰よりも、お金を得ることの大変さを、知っているからだ。

私の父の職業は、サラリーマンである。自動車部品を造る会社に、勤めている。そこで、塗装という作業をしている。アルミホイールに、色などを塗っているらしい。聞いたただけだと、簡単そうな作業だと、思われるかもしれない。しかし、決してそんなことはないのだ。父の、手の平の皮膚は、硬くて、カサカサになってしまっている。これは、塗料などに含まれている、有機溶剤のせいだ。有機溶剤とは、シンナーなどの、体に悪い影響を及ぼす物質である。これを大量に吸い込んでしまったり、体や手足に付いてしまったりしないように、作業中は、口にはマスクを付け、頭には帽子をかぶり、つなぎという服を着ているそうだ。夏は特に、とても暑い格好だと思う。しかも、熱で色を焼きつけるために、作業場は、かなり暑いそうだ。そのため、ただでさえ暑い夏は、だいぶ汗をかき、仕事から帰った後の父の服には、汗がかわいてできた、塩の跡が付いていることもある。毎日、一日中、とても暑い中、体に害のあるものを目の前にして、働いているということになる。

このような、きつい仕事に対して、父は、私たち子供の前で、あまり弱音をはかない。しかし、私は、父が実はとっても疲れていて、会社に向かう足取りが重いことを、知っ

ている。それに前、母がこんなことを言っていた。

「お父さんはね、本当は、あの仕事、好きじゃないんだけど、麻理たちを育てたり、食べさせたりしていくための、お金が必要だから、ああやって、毎日がんばっているんだよ。」

それを聞いて、私は、父への感謝と、尊敬の気持ちと共に、改めて、お金を得ることの大変さを知った。楽をして、大金を手に入れる人は、滅多にいない。私も、将来、なにかの職業に就くと思うけど、「楽しんでお金を得よう」なんて、思わないようにしたい。

「お前は、誰かのお金をむだにしたんだぞ。」父が言った、この言葉の意味がわかった。財布をなくしたあの日、私は、お金をむだにしてしまったのと共に、お年玉をくれた、親せきの誰かの苦労も、むだにしてしまったのだ。きっと、父のように、一生けん命働いて、手に入れたお金だったと思う。そういうことをちゃんと理解していれば、あんなに簡単に、財布をなくさないですんだかもしれない。

よく、「お金をむだ使いしてはいけない。」とか、「お金は大切にしなければいけない。」とか聞くけれど、それは、そのお金に、誰かの苦労と気持ちが、つまっているからなんだ。私が毎月もらうおこづかいには、父と母の苦労と、私への期待の気持ちがつまっているのだと思う。だから、おこづかいは、大切に使うなければいけない。自分にとって、本当に必要な物ができたときに、使いたい。そして、お金の大切さを教えてくれた父が、私たち家族のために、厳しい仕事をこなしている姿を、いつも胸に刻んでいたい。

